

二〇二二年度入学試験問題 (第二回)

国語 (五十分)

【注意】

- 一 この試験の問題文・設問は、1ページから17ページに印刷されています。
- 二 解答は、すべて別の「解答用紙」に記入しなさい。
- 三 文字は、正しくきちんと書きなさい。
- 四 、。、「」はそれぞれ一字と考えなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

緑山中学校には、かつて「エンドーくん」という伝説の生徒が在籍していた。様々な伝説を残すとともに、校内のあちらこちらには、「エンドーくん」にまつわる落書きがされている。

新任の体育教師の清水勇氣は、体育祭に向けてクラスの中で短距離走のタイムが悪い生徒たちを放課後に指導していたが、熊谷敦は、「エンドーくん、たすけて」とグラウンドに書き残して帰ってしまい、翌日は怪我を理由に学校を欠席してしまっていた。

次の日、熊谷は登校してきた。見たところ、元気そうだ。顔色もいい。

「だいじょうぶか？」

「はい、ご心配をおかけしました」

声をかけた清水にも、大人びた返事を返してきた。安心した清水は、用意していたコピーを差し出した。

「これ、よかったら読んでみないか。速く走るためのトレーニング法だ」

「へえ」

思ったとおり、熊谷は興味をしめした。

「わかりやすいな、これ」

「今、クラスの何人かが自主的に練習をしているんだ。体育祭までに、タイムを上げてクラス対抗リレーで優勝する意気込みだ。熊谷も足の具合がよくなったら、合流しないか」

「何人かって、だれですか」

コピー用紙に **X** を落としたまま、熊谷はたずねる。

「沢田、榎田、松永だ。昨日から練習を始めたんだけど、

三人ともぐんとタイムが上がったぞ」

意気揚々と話す清水を、熊谷は上目づかいで見た。

「榎田、さん？……」

「榎田がどうかしたか」

「いえ、まったくどうもありません」

A 熊谷はきつぱりと首をふつたが、何かあるらしいことは

Y を見るより明らかだった。その証拠に、熊谷は話を打ち切るように背を向けて、自分の席にもどってしまった。

昼休み、清水は印刷室で速く走るためのトレーニング法をクラスの人数分刷っていた。熊谷に渡したコピーを見た生徒から、「熊谷だけずるーい」とクレームがついたからだ。生徒はえこひいきに敏感だ。

それにしても、熊谷の榎田に対する反応は何だったのだろうか。そのあとの体育の授業中、それとなく熊谷と榎田を見ていたが、気になるところはなかった。もつとも、今日の体育は体育祭の全体練習で入退場とラジオ体操だったから、立ち位置が離れた二人の間には、接点がなかったこともあるが。

カシヤン、カシヤンと音をたてて、小気味よく出ていた印刷物が、ぴたっと止まった。紙ぶまりのマークが出ている。しゃがみこんだ清水の目が、先日発見した落書きをとらえた。

エンドーくんは、体育祭の星

これは、いつごろのものだろうか。清水はしげしげと壁を見た。鉛筆書きの落書きだ。壁はまだ比較的きれいだから、ぬりなおされたあと書かれたものだろう。いつの間にか清水は、落書き鑑定士のようになっていた。

たいていの教師がやめてしまったと言うが、清水は落書

き探しにあきることにはなかった。それどころか、書かれている内容や場所から、それらの時代を推理するのは、けっこう楽しかった。手が届くところの落書きはすぐ消されるらしく、新しいものが多いが、天井近くや、ひっそりとした場所には、古い落書きがまじっている。そんなものを見つけたときには、気分がちよっと上がる。松永の言ったとおり、かくれミッキーを見つけたときのような気分だ。

「体育祭の星か。よーし」

^B清水は落書きを見つめながらこぶしをかためた。それは自分に対するエールのようにも感じられた。

「体育祭の星は、二年三組がいただきますよ」

清水はこぼれる笑みをそのままに、つまっていた紙を引っぱり出した。

清水に乘客があつたのは、その二日後のことだった。放課後、グラウンドにいた清水のもとに、赤坂*が小走りで近づいてきた。しぶい顔をしている。

「清水先生、お客さんです」

ちらっと、視線をやった先には女の人立っている。百メートルくらい距離があるので、表情は見えないが、じつ

とこちらを見ている。

「保護者ですか？」

「熊谷さんです。清水先生、何やったんですか」

清水の問いに赤坂は軽くうなずき、いつそう険しい顔をした。

「熊谷……」

清水はグランドのすみを見やる。そこでは十人ほどのクラスの生徒たちがスパート練習をしていた。コピートを配って以来、自主練習する生徒が増えているのだ。目をこらしたが、熊谷の姿は見えなかった。

サッカー部と自主練習組に声をかけ、指示を出した上で走っていくと、熊谷の母親らしき人物は軽く会釈をし、

「お忙しいところすみません。熊谷敦の母です」

と、事務的に名乗った。

「応接室へ行きましょうか」

「いえ、ここでけっこうです」

清水の提案を断った母親は、グランドのすみに目をやった。

「みなさん、ああやって練習しているんですね」

「ええ、来週の体育祭に向けて一生懸命なんですよ。クラ

ス対抗リレーでは絶対優勝するんだって、張りきっています」

「うちの子は『来るな』と言われたそうですけどね」

「来るな？」

清水は思わずき返した。

「そうです。『熊谷くんは、足が痛いなら無理はしないほうがいい』って」

「それは『来るな』ではないんじゃないですか。熊谷くんを気づかっているんだと」

清水はあわてて反論したが、言葉の途中でさえぎられた。

「大人の世界では、それは『来るな』と同意語です。実際、敦もそう感じたそうです」

「そう、ですか……」

清水は言葉を飲みこんだ。

「子どものころから、敦は空気の読める子なんです。だから遠慮しているんだと思いますよ。自分がいないほうがクラスの和がたもてると思っっているんじゃないでしょうか」

ちょうどそのとき、グランドのすみからにぎやかな声がかきこえてきた。

「沢田ー、やってんじゃねーよ」

「うけるー」

「わはははっ」

見ると、生徒たちが楽しそうに笑い転がっていた。熊谷の母親は、「ほらね」と言うように清水を見た。

「で、熊谷くんは？」

足の具合についてたずねたつもりだったのに、母親は一瞬目を泳がせ、

「今日は塾に行っています」

伏し目がちに言った。だがすぐに顔を上げ、

「でも、先生からいただいたコピーは、毎日読んでいます。じゃまもの扱あつかいさえされなければ、速く走りたいという意欲いじゆぶんは充分にあるんですから」

まくしたてるようにつなげた。清水をぐっと見すえる。

相手をひるませるほどの熱心な目つきだ。

「あの、先生。意欲はあるんです。もし仮に、敦のせいで体育祭で思うような結果を残せなくても、意欲はあるんだということをお忘れなくくださいね」

「はい。それはほくもよくわかっています」

清水が答えると、母親は安心したようにうなずいた。

帰っていく母親の背中を見ながら、ふと、清水は気になつていたことを思い出した。呼びとめようとして、やめた。この話は本人に直接きいたほうがいい。

清水は走ってグラウンドのすみにもどり、声をかけた。

「榎田、ちょっといいか」

「それは体育の成績を気にしているんですよ」

職員室で赤坂に報告していると、矢島が横から口を出した。

「自分の子は塾での勉強が忙しくて、体育祭の練習どころじゃないけど、意欲はあるんだからそこを評価してくれて言うんでしょ」

「体育祭も授業の一環いっかんですから。成績表に1や2がついたら、内申書にも響ひびきますからね」

「なるほどね」

口で答えながらも清水の心は、先ほどから波立っていた。熊谷の体育の評価はペーパーテストの点を加味すれば、3以上はつくだろう。しかし彼の身かみには、どうやらそれよりも深刻な問題がひそんでいるようだ。

清水は椅子いすに座り、先ほど榎田から聞いた話を思い返し

てみた。

榎田は、自分たちのところへもどってきた清水から名前を呼ばれたとき、おびえたように、びくと体をふるわせた。これは何か事情がありそうだと、クラスのみんなには声がかきこえない場所にまで連れ出してから、たずねてみた。

「熊谷のことで、ききたいことがあるんだけど」

そう Z を向けると、

「おばさんが言いつけにきたんでしょ？」

榎田はこわばった声を返してきた。

「え？」

「だから、今来てたでしょ。熊谷のおばさん」

榎田は、清水が応対していた相手を見ていたらしかった。

「ああ。でも、お母さんからきいたわけじゃないんだ」

そう言うと、榎田はやつと両ほおを少しゆるめた。

「熊谷とは家が近いだろ。それであいつの家での様子を知ってるんじゃないかと思ってな」

そこまでできくと、榎田は安心したように声をあげた。

「なんだあ。またおばさんが文句言いに来たのかと思った」

「文句？」

「うん。春休みにね、うちに来たのよ。榎田さんからこんなにいっぱい手紙がきたって」

榎田は親指と人差し指を目いっぱい広げてみせた。

「たった二通だけだったのに」

下くちびるをつき出す。

「敦にちよつかいをかけないでみたいなこと言われたって、親が言ってた」

「ラブレター出したのか？」

たずねる清水に、榎田は顔をしかめた。

「やめてよ。最悪だよ、あんなやつ」

むしろでも走ったのか、気味悪そうに体をふるわせる。

「だいたい手紙よこしたのは向こうだったんだよ。それも、なんか難しいことがいっぱい書いてあって、意味がわからなかった。それでもいちおう返事を書いたの。礼儀だと思つて。そしたら、また手紙が来たの。今度もわからないうことがいっぱい書いてあった。アインシュタインとか、ニーチェとか。まじ引いた。しかもおばさんまでしゃしゃってくるし」

榎田はよせた眉間をいっそうせまくして、

「二年生になっても同じクラスなんて、最悪。クラスがえ
のとき、みんなもどん引きしてた」

とはきすてるように言った。

「みんなって、手紙のことクラスのみんなも知ってるの
か？」

「うん。始業式の日^Dに友だちに話しちゃった」

清水の問いかけに、榎田はあつさりうなずいたのだっ
た。

「うーむ」

先輩教師たちの助言を片耳で聞きながら、清水は頭の中
で榎田の話を整理し、うなづいた。それは熊谷もつらから
う。あのプライドの高い熊谷が。それでなくても、思春期
の自我はむき出しで傷つきやすい。それを守るために熊谷
は、精いっぱいの理論武装で、榎田に恋心を告白したの
だ。それが受け入れてもらえなかったただけならまだしも、
おおっぴらになってしまったのだ。

赤っぱじのダブルパンチ。

*ふにん
赴任初日に正々堂々とましがえた校歌を歌い、それに解
釈までつけた記憶と重なり合い、深く熊谷に同情したと
き、ふと、ひとつの疑問がほじけたような気がした。

エンドーくん、

始業式の日^Dに後ろの黒板に落書きをしたのも熊谷だった
のではないか。

清水は文字を思い出してみた。

エンドーくん、

エンドーくんのあとに、読点がつけられていた。本当
は、たすけて、と続けたかったのかもしれない。熊谷の席
は、いちばん後ろだ。いやなうわさを流された熊谷のS O
S だったのではないだろうか。

「おい、熊谷、ちょっと手伝ってくれるか」

次の日の放課後、清水は熊谷に声をかけた。自主練に向
かうクラスメートたちを横目で見ていた熊谷は、素直に清
水にしたがった。いっしょに印刷室に向かう。

「悪いな。今日は塾はないのか」

「……、はい、だいじょうぶです」

熊谷はいぶかしげに目線を上げた。

「どうだ、具合は？ 足はまだ痛いかな」

「足は、もう痛くないですけど」

心のほうは痛いのか。

清水は軽くうなずき、おもむろにその場にしゃがみこんだ。

「ちょっとこれ見てみる」

印刷機の裏側の壁を指さすと、熊谷も腰を折つてのぞきこんだ。

「読んでみる」

「エンドーくんは、体育祭の星」

うながすと、熊谷は小さな声を出した。

「この間これを見つけたときは、うれしかったぞ。これは、自分に向かって言われた言葉だと思った」

「……、はあ」

「いっしょに二年三組を体育祭の星にしようじゃないか」

清水は力をこめたが、熊谷はあいまいに首をかしげた。

「その下も読んでみる」

清水は次に、その下にある字を指ししめした。

「たかが、七十五日だ……?」

読んでみたものの、熊谷は意味がわからないというように、首をかしげる。

「人のうわさも七十五日という言葉を知っているか」

清水がたずねると、熊谷は一瞬顔をひきつらせたあと、

首をふった。

「うわさなんて、七十五日もすれば消えてなくなるということだ。手紙のときいたよ。いやなうわさが広まっちゃったんだってな」

熊谷はうなだれた。

「おれのあだ名も同じ日についた。四月五日、始業式の日だ」

そう言うのと、熊谷は少しだけ目をあげて清水を見た。

「おまえのうわさは、六月十九日には消えるだろう」

おびえたような目を、清水は力強く見つめる。

「だから、心配するな」

熊谷は思案するように少し目を伏せたが、やがて視線を清水にもどした。

「はい」

少しだけだが晴れやかな顔になっている。清水は立ち上がった。窓の外を指さす。

二年三組の生徒たちが、練習をしている。

「おれとおまえだけじゃない。みんな多かれ少なかれ、はずかしい思いもしているし、つらい記憶も持っているんだ。でもそれが、あまり気にならなくなるくらい、うちこ

めるものがあるといいなと、おれは思っている」

となりで熊谷も立ち上がる。清水と並んで、グラウンドを見る。

「エンドーくん、ではなく、二年三組は体育祭の星」

清水は大きな声で言った。

「おまえの足はいい足だ。正しい訓練をすれば、絶対速くなる」

「ほんとうですか」

熊谷の目が初めて輝いた。それはまぶしいほどで、清水は目を細めた。

「ほんとうだ。ここで待っているから、着がえてこい。」

いっしょに行こう」

「はい」

うながすと、熊谷は素直にうなずいてきびすを返した。

熊谷が印刷室を出て行くのを確かめてから、清水はもう一度しゃがみこんだ。ポケットに入れていた消しゴムで、壁をこする。

たかが、七十五日だ

自分が書いた文字が、あっという間に消えていく。

あいつはいいよな、うわさだから。

それにひきかえ自分の失敗は、あだ名を呼ばれるたびに思っておこされ、語りつがれていくのだろう。

清水は首をすくめながらも、ていねいに壁をこすった。

^F 熊谷の心に刻まれた、

エンドーくん、たすけて

の文字が、すっかり消えたことを願って。

(まはら三桃^{みと}『伝説のエンドーくん』による)

【注】

*赤坂——清水の先輩の教師。矢島も同様。

*自我——他人と異なった独立した存在として、自分自身を認識すること。

*赴任初日に——校歌の「清爽^{せいそう}」という歌詞を「清掃^{せいそう}」と勘違^{かんちが}いして、生徒から「おそうじくん」と呼ばれている。

問一 空欄

X

Y

Z

にあてはまることばを、次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 火 イ 水 ウ 耳 エ 目

問二 — 線部A「熊谷はきつぱりと首をふった」とあるが、なぜこのような行動をしたのか。説明しなさい。

問三 — 線部B「清水は落書きを見つめながらこぶしをかためた」とあるが、このときの心情として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 熊谷敦と向き合っていく覚悟を決めている。

イ 目立たない場所の落書きを見つけて喜んでいいる。

ウ クラス対抗リレーで優勝しようと決意をしている。

エ 自分が体育祭の星となるように頑張ろうと思っている。

問四 熊谷敦の母親の行動や心情についての説明として、適当でないものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 息子がかけられた言葉をそのままは受け取らず、抗議のために学校に来て、清水には反論もさせなかった。

イ 息子が練習をせずに塾に行っていることを話すときは、明らかに動揺し、話しくそうにしていた。

ウ 息子にも体育祭への意欲があることを伝えるときは、それまでとは一転して、笑顔で優しい言い方になった。

エ 息子の体育祭への意欲に関して清水が理解を示すと、それまでの態度が変わって、満足して帰っていった。

問五 ——線部C「口で答えながらも清水の心は、先ほどから波立っていた」とあるが、「波立っていた」のはなぜか。説明しなさい。

問六 ——線部D「清水の問いかけに、榎田はあっさりうなずいたのだ」とあるが、なぜ榎田は「あっさり」うなずいたのか。説明しなさい。

問七 ——線部E「精いっばいの理論武装」とあるが、熊谷敦がした「精いっばいの理論武装」とは何か。答えなさい。

問八 ——線部F「熊谷の心に刻まれた、エンドーくん、たすけて の文字が、すっかり消えたことを願って」とあるが、熊谷敦の心からその文字が消えようとしている理由を、七十五字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

まず、何かの情報に接した時には、その情報の「**次数**」を考えてみるのが非常に大切である。なぜなら、一般に情報Aの「**次数**」が上がつていくほど、情報の質は落ちていき、正確さを欠くようになる、という法則のようなものがあるからだ。

具体例を挙げて説明しよう。あなたの目の前で女性が駅のホームから転落し、列車にひかれたとする。あなたは転落の瞬間しゆんかんを自分の目で見たと。このように自分の五感で直接知覚した情報は「一次情報」であり、あなたが夢でも見えない限り、転落の発生は一〇〇パーセント疑いような正しい正確な事実である。

次に、転落の瞬間は見えていないものの、騒ぎさわぎを聞いて現場に駆け付けたあなたが、目撃者もくげきしやから事故の様子を聞いた場合、その情報は「**二次情報**」になる。この段階で既に、情報の精度が落ちていく可能性がある。目撃者が「自分の考え」を交えて話していたり、何かを見間違みまちがえていたり、最悪の場合は作り話をしていく可能性があるからだ。

あなたは目撃者から聞いた情報をもとに、混乱する駅の

様子を写真に撮り、ツイッター*に投稿した。この投稿を見た人にとって、あなたからの情報は「三次情報」だ。次にこの投稿を見た人が、自分でコメントを付けてツイートを拡散した。これは次の人にとっては「四次情報」である。

ここまで来ると、情報の精度は相当低い。転落したのが本当は「中年女性」であったにもかかわらず、たまたま誰かが「制服を着ているように見えた」と感想を交えて情報を伝言したことにより、「四次情報」の段階では「転落したのは女子高生」になっていたりする。

マスメディアで働く記者が、転落した人物の性別や年齢を間違えて報道するようなミスは極めて少ない。プロの記者は、そうした基礎情報きそせうについては事故を処理した警察で入念に確認するからである。

しかし、マスメディアが事故の詳細しゆじょうさいまで正確に伝えているかという点、必ずしもそうではない。何か事故や事件が起きると、まず現場に警察官が赴く。しかし、駅ホームでの転落事故の場合は、現場に行った警察官も事故の瞬間を見ていたわけではないので、目撃者から聴取した情報は既に「二次情報」だ。

その「二次情報」が上司の課長に報告されると、課長は被害者の自宅や勤務先などから得た情報を加味して、転落が「自殺」なのか「不慮の事故」なのか「第三者による故意」犯罪なのかを判断する。この時点で課長が作成した事故に関する書類は、既に「二次情報」だ。この「三次情報」が警察署の広報担当の副署長に報告され、記者の耳に入る。記者の仕事は忙しいので、よほどのことがなければ現場に行くような追加取材はせず、警察の発表をもとに記事を書く。記事が読者の目に触れた時、これは既に「四次情報」である。

記者の中には、ジャーナリズムの基本に忠実に、現場の駅へ足を運び、可能な限り「次数の低い情報」にアクセスしようとする良質な記者もいる。

現場へ行くと、マスメディアが読者・視聴者に届けた「四次情報」にはなかった真相が新たに判明することもある。1、ホームが異様に狭いとか、事故が起きたのはホーム上が非常に混雑する時間帯だった、といったことだ。警察発表に基づいて書いた記事では、あたかも転落した本人の過失であるかのように描かれていた事故が、ここで初めてホームの構造に起因する問題であった可能性が

見えてくる。真実への近道は、可能な限り一次情報に近づくことである。

先ほど、ホームからの転落事故を目撃したのであれば、それは「一次情報」であり、転落の発生は疑いようのない事実であると記した。

しかし、一次情報でさえあれば、常に「良質な情報」と言えるのかは全く別の問題である。例えば、現代社会では、内閣官房、中央省庁、政党、企業、大学、都道府県庁、市町村役場、捜査機関、国際機関、財団法人などのどのような組織であっても、必ず広報担当部署や広報担当者置いて情報を管理している。

各組織の広報担当部署の仕事は、知らせたい情報を積極的に広報することである。企業であれば、新商品や新サービスの開発などを広報することである。私たちの周りには、「携帯電話企業A社が若者向けに新サービスを始める」といったようなニュースが溢れている。それはそれで、消費者にとっては大切な「一次情報」ではある。

しかし、裏を返せば、それは「A社がより多くの利益を上げるための情報」でしかないとも言える。どのような組

織であれ、知らせたい情報を積極的に広報しているのと同時に、知られたくない情報を可能な限り隠しながら仕事している。

その新サービスが本当に社会全体にとって有益なのか。そのサービスを始めることによって、何か新しい問題は起きないのか。企業が新サービスのそうした負の側面を物語るデータを積極的に広報していたら、新サービスは最初から赤字になってしまう。

2、何かの情報やデータに接した時には「何が明らかにされているか」だけではなく「何が明らかにされていないか」を想像することが非常に大切である。これは【X】にできることではなく、プロのジャーナリストにとっても大変難しい作業だ。修練を必要とする難しいテクニックではあるが、膨大な発表情報の裏には膨大な「隠し事」があることを知っておいていただきたいと思う。

(中略)

プロのジャーナリストではなくても、さまざまな情報に接した時には、情報そのものを吟味するのと同時に、情報の発信者や媒介者について吟味することが大切である。

なぜなら、情報の提供者が最初から嘘をついている場合

もある。不祥事を隠したい。恨みのある誰かを陥れたい。不確実なのに確実だと言いつ張って注目を浴びたい。——。そういう思惑を持った人間はこの世に少なくない。必ずしも悪意ではなく、他人からの伝聞なのに目撃者であるかのように話すことや、推測を実体験にすり替えて自慢話にしてしまうことは誰にでもあることだ。

その情報提供者の組織内における立場や社会的立場から考えて、なぜ、その情報を知ることができたのか。情報発信者の動機は何か。直接その目で見えた情報なのか、他人から聞いたのか。聞いたのだとしたら、当事者から直接聞いたのか、又聞きなのか。いつ、誰から、具体的にはどんな文言でその情報を聞いたのか。情報が伝達されていく過程に、何か不自然な流れはないか。

情報提供者に対して英語の5W1H (Who, What, When, Where, Why, How) に当たる事柄を一つ一つ確かめていくと、話が矛盾が生じたり、きちんと答えられなかったりすることは珍しくない。そうした作業を進めることによって情報は分解され、「確実なこと」「不確実なこと」「事実」「推測」「願望」「意見」「嘘」の分類が可能になってくるのである。

このような作業を進めていくと、当初の想像や仮定を覆す様々な情報にぶつかる。そこで最後に重要なのは、事実を確定するために確実な「証拠」をつかむことでしかない。「大統領選挙で不正は行われたはずだが、不正の具体的証拠について自分は知らない」ではダメである。「ウラ」を取らなければ、事実とは言えないのだ。

とはいえ、プロであってもウラを取るのには容易でない。そのような場合には、ある情報についてのウラが取れていないことを正直に認め、未確認情報として扱う必要がある。

「自分はここまで調べたが、これ以上の証拠はない」と正直に兜を脱ぐことは、他人から信頼されるためにとっても大切なことだ。

プロの記者でもないのに、様々な事故や事件の現場に行って、一次・二次情報を集める時間のある人はほとんどいないだろう。ならば、伝聞や憶測の混じった話を事実であるかのようにツイートしてはならない。真相の分からない事柄については、判明している範囲の確実な事実をシエ

アするのにとどめるべきであり、ましてや安易な非難、嘲笑などを発するべきではない。不確実な事実に基づいた情報拡散が、どれほど深く人を傷つけ、社会を混乱させているかは見てきた通りである。

繰り返すが、今の時代、市民は情報の受け手であるだけでなく、一人一人が社会に何らかの影響を与える情報を送り手でもある。したがって、プロのジャーナリストだけでなく、一般の市民にも「正確な事実をつかむための作法」が要求されているのである。

（白戸圭一『はじめてのニュース・リテラシー』による。
なお一部本文を省略しています。）

【注】

* ツイッター—— インターネット上で文や画像を発信（ツイート）したり、他人の投稿を読んだりできるサービスのこと。

* 吟味—— 詳しく調べ確かめること。

問一 ――線部A「情報の「回数」が上がっていく」とあるが、「情報の「回数」が上がるとは、どういうことか。説明しなさい。

問二 ――線部B「二次情報」の具体例として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 交差点で交通事故を目撃した母からその時の様子を直接聞いた。

イ とある事件を取材した詳細な記事をインターネット上のサイトで見た。

ウ 目撃者のインタビューを元に再現された災害のニュース番組を視聴した。

エ 家の近くのコンビニで買い物をしていたら万引犯が逃走するのを目撃した。

問三 空欄

1

 ・

2

 にあてはまることばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア あるいは イ しかし ウ したがって エ 例えば

問四 ――線部C「一次情報でさえあれば、常に「良質な情報」と言えるのかは全く別の問題である」とあるが、それはなぜか。

それを説明した次の文の空欄にあてはまることばを、文中から三十字以内で抜き出し、初めと終わりの五字をそれぞれ答えなさい。

情報を発信する組織は、

から。

問五 空欄【 X 】にあてはまることばとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 一喜一憂いっきいちゆう

イ 一世一代

ウ 一朝一夕いちちよういつせき

エ 一長一短

問六 — 線部 D「そうした作業」とあるが、この「作業」は何のために行うのか。それを説明した次の文の空欄

I

・

II にあてはまることばを、文中からそれぞれ十字以内で書き抜いて答えなさい。

I だけでなく、

II の嘘を見抜くため。

問七 — 線部 E「一般の市民にも」正確な事実をつかむための作法」が要求されている」とあるが、「正確な事実をつかむための作法」とはどのようなことか。全体をふまえて説明しなさい。

三

次の①～⑤の――線部のカタカナを漢字にしなさい。

- ① 空モヨウがあやしくなってきた。
- ② 力士がドヒヨウ入りする。
- ③ 試合に勝つための計画をネる。
- ④ 仕事のコウリツを上げる。
- ⑤ 何も持たずに避難するのはムボウビだ。

